

資料

ヴィヘルン『ドイツ国民への覚書』 (下・1)

北 村 次 一

訳 者 序 言

1848年春、ヨーロッパは「革命」の渦のなかにあった。その運動はマルクス＝エングルス『共産党宣言』をもって導きの理念とした労働者の国際的連帯を志向した。これに対抗するキリスト教的社会運動には、カトリック的立場ではケテラー、プロテスタントではヴィヘルンという二人の代表的な人物があり、後世、長きにわたる影響をもたらした。爾来150年、いま世界的な歴史変動のなかで、それぞれが節目の年を迎えつゝ、新たな批判と評価を必要としている。

筆者は、かねて、「ドイツ・キリスト教社会改革史」をドイツ経済史研究のひとつの柱として構成していたが、マインホルト教授の編纂校訂にかかわる『ヴィヘルン著作全集』の邦訳を志し、とくにその主著『ドイツ福音教会インネレ・ミッシオン。ドイツ国民への覚書』〔Die innere Mission der deutschen evangelischen Kirche. Eine Denkschrift an die deutsche Nation〕の翻訳に集中してきた。この著作への最初の接触は、拙訳『ヴィヘルン著作選集』＜1＞（キリスト新聞社、1984）所収の一篇として取上げたときで、そこでは僅かにその「序文」のみを邦訳した。量的には原著に付せられた2ページ足らずの文章であるが、同書の社会的特質がその短文にもかかわらず、字句のはしばしに横溢しているもので、当初より、後日の本文邦訳は自他ともに期せられたところであった。

19世紀ドイツの世界史的事件「三月革命」の生みだしたこの著作。ヴィヘルンはドイツのみならず外国における同時代的な社会主義・共産主義文献を追求していたが、いま改めてこの事件の本質について、切迫した分析を試みようとした。いまその間の経過について、拙稿『ヴィヘルン・ディアコニーの本質』（ディアコニー研究会、1993）の一節「インネレ・ミッシオンの展開」（同、p. 24以下）を引用して、繰返

し明らかにしておこう。

インネレ・ミッションはまさにプロレタリアートの底辺において奉仕する教会の救済活動である。それは社会問題への無理解な対応によって罪過を負うキリスト教自体に対する悔改めの勧めから始められるべきであり、教会はプロレタリア大衆の成立を条件つけた所与の事実に適応すべきであり、プロレタリア大衆に直接的に福音を説教する施設であるべきである。もしプロレタリアが最早や教会を訪れぬものとすれば、われわれは街頭説教師として、雑踏する民衆の中で、その説教の場所を説教壇と変えよという。説教だけではない。プロレタリアを、その家に、その職場に、鉄道に、土木工事の現場に、海上労働の場所に求めて、説教者自らが貧しくなり、貧民・プロレタリア説教者になって、プロレタリアの中で、プロレタリアによって、つまり当時の共産主義がとらえている対象そのものを自らの対象とすること、ヴィヘルン・ディアコニーに特徴的なインネレ・ミッションの基本姿勢である。「インネレ・ミッション」という独特のコンセプトはいつ、どのような経過で、ヴィヘルンの思考と行動に登場したのか？

さきに、『フリーゲンデ・ブレター』という独自の大衆伝道メディアの発刊について触れたが、同誌は1844年から1905年まで継続された包括的機関誌で、まさにインネレ・ミッションの全領域のため計画された業務報告誌である。

ところでマインホルトの紹介と注釈を借りると、ヴィヘルンには、「インネレ・ミッションの根本的な問題のために、1841年以来『インネレ・ミッションのための雑誌』〔と訳称される〕の創始が、すでに彼の念頭に浮かび、多くの友人がこの雑誌の援助を申し出たにもかかわらず編集のための必要時間が彼になかった」と。その初期インネレ・ミッションの理念を、ヴィヘルン自身の言葉で綴るところである。「……わがプロテスタント的信仰団体は世界を克服し世界を信服させる行為が実り多き萌芽を自らに隠している。それでこの団体は直接的にキリストおよびその精神の団体を有し、それとともに、生ける愛、自由真理、知恵を自らに含み展開す行動力それ自体である聖霊のみたしを有している。この宝をわが教会は、すでに一千倍も開放し、それから言葉と精神によって、ふたたび実り多くなった土地にすでに、静かにまた公然と、多くの事業・団体・施設があらわれている。

それは団体における神の臨在を、しばしば単なる言葉よりも力強く立証したものである。まだ信ぜぬ者をその柔かな、平和の息吹によって福音の是認に導くものである。われわれは、このような福音的愛の事業と活動方法を考えている。その全体がインネレ・ミッションの名で総括されるものである」。同時代の包括的・根本的な死活問題を把握し指導する「インネレ・ミッション原理」の発想。

1848年9月、ヴィッテンベルク教会会議は教会同盟の設立に関する討議で最初の議事日程を消化していたが、教会への緊急問題として教會的実践の優先権をこの会議に求めていたヴィヘルンは、「教会は教会として実践に関し、大きな罪責を償い、新しいことを始めねばならぬ」と主張し、はじめてインネレ・ミッションを議題にのせさせた。「世界史の転回点」としての1848年のヴィヘルンの認識と実践は教会史と社会史の両面においてユニークであり、この教会会議の流れそのものをも変えるにいたった。彼の提案に応じてこの問題が翌日の会議で緊急に取り上げられた。その際「キリスト教的・社会的目的、団体、施設、とくにインネレ・ミッションの振興」という議題に、ヴィヘルンは「即席」での演説を行い、躍動的な口調によって議場に緊張と興奮をもたらした。

それによって、ヴィヘルンがこの教会会議で戦った目標、即ち「時代の要求に対しその全体において福音主義教会の義務としてインネレ・ミッションを認めるという目標」が果たされた。教会会議はインネレ・ミッション中央委員会の形成のための委員会を設置し、同年11月、暫定委員会が発足した。その委託によってヴィヘルンは「綱領」を作成し、「定款」とともにインネレ・ミッション中央委員会の活動の根拠となった。「インネレ・ミッション原理」の確立。

1849年から『フリーゲンデ・ブレター』は、同時にドイツ福音主義教会インネレ・ミッション中央委員会の機関誌となった。綱領と定款も同誌に公表された。同時に、ヴィヘルンの最大のエネルギーは「基本的な諸側面およびその実践的活動の充実に則してインネレ・ミッションに関する彼自身の従来からのあらゆる詳論」を総輯することにそそがれた。かくて公刊されたのが『ドイツ国民への覚書』（略称『覚書』）として周知の大著『ドイツ福音主義教会インネレ・ミッション』で、それは「単にヴィヘルンについてのドキュメントであるのみでなく、同時に教會的意識の強化についての実現についての表現であり、全時代を満たすキリス

ト教的愛の実現の義務の表現」（マインホルト）であり、まさしく福音主義教会の古典的著作に属する。「キリストにおいて、キリストを通して、すべての信仰が愛にいたり、すべての愛が信仰にいたらんとするとき、わが民衆にキリストから新たに生じる回春の先触れたろうとしている」—ヴィヘルンが序文末尾にこの文章を誌したのは49年4月、初版は数週間で売切れ、8月第2版が準備された。

『覚書』の構成を目次で示すと、「第1編 インネレ・ミSSION一般」、「第2編 インネレ・ミSSIONの領域」（I 内部的境界線 1 国家的領域, 2 教會的領域, 3 一般＝道德的領域, 4 社会的領域。 II 地理的境界線 1 祖国におけるインネレ・ミSSION, 2 ヨーロッパ・ディアスポラにおけるインネレ・ミSSION, 3 大西洋彼岸におけるインネレ・ミSSION）, 「第3編 インネレ・ミSSIONの組織に関して」（組織一般に関して, 中央委員会）, 「付録」（中央委員会委員, 同定款, アгент・自由コルレスポネント, 既加入団体）。

1999年、20世紀を終るこの年、同書は初版の出版150周年を迎えることになる。年来、同書の邦訳に従事してきた筆者は、この記念の年に完訳を公刊したいと念願していた。ラウエス・ハウス館長ザットラー牧師からの書簡によって、その前年、1998年、インネレ・ミSSION中央委員会の創立150周年の諸行事が予定されているとのが報じられた。そこで、同書の前半部分を『ドイツ国民への覚書（上）』として、『ヴィヘルン著作シリーズII』の体裁をもって出版した（法律文化社、1997年11月）。同訳書は上記目次に従って「第1編」、「第2編」、I までを包含しており、爾余を『覚書（下）』に譲った。本稿に累次示すのは「第2編」、II 以下の内容である。

II. インネレ・ミッシオンの領域の地理的境界線

地理的關係において、ドイツ福音主義教会のインネレ・ミッシオンにとって内国伝道の課題を、(1)祖国の内部、(2)ヨーロッパにおける祖国の外部、(3)大西洋地域におけるそれを、明白に区別するために、3つの線を引くことにする。

1. 祖国の内部におけるインネレ・ミッシオン

この概観の前半を通じて祖国の国境の内部におけるインネレ・ミッシオンに関して見いだされることを十分に観察した。すべてそこで述べられた国家的・教會的・社会的危機やそれに関連する救助はその場所が福音主義ドイツの国境の内部にあった。ここでなお考察することができ得るのは、恐らく、如何にこの国境の内部でまた非常事態とインネレ・ミッシオンの働き手が集まっているかを叙述する試み、つまりインネレ・ミッシオンの必要性の地理学の試み、それについてはわれわれがここで後続の発言まで断念するような試みとなるであろう。その必要性は一般的なものであるが、ここで際だって相違を生じるのはこの必要性の認識と承認との程度に非常な差があること、あるいはまたこれまでいろいろ形作られた国民の危機のあれこれの面が際だってることによる。われわれが今その中にいる革命期こそはこの点において勿論大きな地ならしを実現させるもので、キリスト教的な基礎と神の定められた秩序とを出来る限り破壊することにより、この非常事態のなかでの差異を絶えず相殺し、一層明白に次ぎのような認識に道をひらくことを助ける。すなわち最深の危機は神的な救済啓示の否認であること、この啓示がもっぱらこの形態あの形態で現れてくるものであらうとなかろうと。——危機が一般的であり、今までインネレ・ミッシオンの精神で生じている救済も同じ程度に僅かにしか一般的でない。この救済の光景を地理学的に示す試み——貴金属または卑金属について祖国が豊かであるか乏しいかを様々な色で明示するgeognostischな地図といったものだが——この試みは信仰において自由かつよどみなき愛という至高の金属を動かす火力がキリスト教的地盤を満たし、突如としてかかる金と銀との堆積を、いかなる鋤夫の技術をもってしても発掘できぬような場所

に出現し、または出現し得るとき、たんに歴史的な価値をもつにすぎなくなるであろう。例えば今まで児童救済の愛の活動においてヴュルテムベルクが明らかに優先的地位にあったとき、一体だれが5年前ごろに、今日ボンメルンがこの関係において北ドイツのヴュルテムベルクになる途上にあると思われるようなことを予想できたであろうか。この地域がそれ故に北ドイツのためインネレ・ミッションの門扉の鍵の担い手になるはずだということは余り確かなことではないので、例えば、もう一度ヴュルテムベルクをそのことの基準としてみる場合、ヴュルテムベルクに比べて、今までプロテスタント的バイエルン、またある程度バーデンがインネレ・ミッションに対し閉鎖的な土地であつたのだが、いまや突如としてバイエルンにおいて、全く別の点から刺激を与えられてインネレ・ミッションのそのような欲求と方向が目ざめ、そこから、全祖国でのインネレ・ミッションの最も祝福された教會的保護援助のための最も重要なシンボルを開花できたことを考えると、上述のことは全くそうではない。——神が祝福された業たらしめんとして、そのことのため神がその時を守ってこられたひとつの業のなかに、神の道を知るのは誰か。このことを顧みると、われらの国民のなかにキリストの国を建てようとするそのような愛の政治的境界がどんどん崩れるであろうことが、また期待される。今日まではこの境界が一部は厳しく守られており、全地域にわたってまったく単独にある種の努力だけが維持され得たところもあった。この種の活動はそこでそのときまで何ら普及しなかったことがいわゆる教會的立場からも幸いであると思われるようなところすらそうであったのである。この古き日は過ぎることをわれらは望む。死は生に、寒さは、キリストこそがそれである永遠の太陽の暖かい光に席を譲らねばならぬ。愛はまさしく十分に集中せしめ、その活動のなかで必然的に考えを集中する。というのは愛は節度を保つことを知っているからである。節度を守ることは愛の最もすばらしい徳性のひとつである。だがそれ故に愛はあたかもそれを網にかけるかのように地方かたぎにはさせない。いわんや門戸や国境を閉すことはしない。愛はその復活した王、閉ざされた扉より来り、人々のまただ中に立っている王のように自由である。救済愛がこの道を実際にしばしば歩み自由にはたらかれたということは、本書での概説の前半で事実として十分に証示したところである。危機のなかでのわが国民の団結的生活、国民の間で愛を求める精神を贈らしめる団結的生活はあまりにも真実であり、それ故にあまりにも強い。それはこの真実が未来に

対する基礎付けとして、祖国においてインネレ・ミッシェンの勝利の領域、生活領域がたえず拡張されるような基礎付けとして奉仕されるのではないということ、あまりにも強いのである。その目的は、人間を救う漁網をもって祖国の危機を包みこみ、信仰の高みに火を燃え立たせて、その光と暖かさをいたるところ働かせることにある。この目的はその活動の意義が祖国の国境を越えて知られることが多ければ多いほどますますより多く達成されるであろう。そこは敵が住み、祖国を破滅させるためにかきたてる別のもうひとつの火以上にたしかに享受し、巧みで熱心な手をもって網を張りめぐらし、その糸を国民にからみつかせ、反キリスト教の深淵にひきづりこもうとしており、あらゆる危機の増大をわが国民の非キリスト教化の目的のための絶好の手段と考えているのである。

2. 祖国のそと、ヨーロッパでのインネレ・ミッシェン

（ヨーロッパのドイツ・ディアスポラ）

アメリカで生活している500万^{*}のドイツ人を除いて、ドイツ祖国の外側で、全ヨーロッパ諸国にわたって1100万ないし1200万のドイツ人が分かれて住んでいる。インネレ・ミッシェンはこれらの人々の間で、ローマ教会に属する人々にも、例えばハンガリア、ロシア、スウェーデンなどで教会団体に組み込まれている多くの人々にもかかわっていない。だが、故郷の教会として他の何らの教會的ささえのない、教會的にさ迷える人々を自らへの担当割り当てとして考えねばならない。ドイツとその運命がきわめて密接にからみあった国々の大ヨーロッパ首都においてはそのような状態にあることについて、このことはとりわけ妥当する。この状態をはっきりさせるために、その場所的な限界をできる限り限定するこの覚書に本来的にはっきりした包括的な叙述から断片を与える。この報告内容はインネレ・ミッシェンがヨーロッパの福音主義的ドイツ人のディアスポラに対して義務を負っているという確信を提示するのに十分であろう。

* ヴェッポイスによれば約150万にすぎないのだが。²⁵⁵⁾

ここでまず第一番目に求められるのはフランスとその首都である。—フランスの首都に向かつてのドイツ人の列は2世紀以来続いている。初めに宮廷の壮麗さと豪華さがそこへと富裕階級を呼びあつめたのだが、最初の革命は大激変をそのなかにもたらした。国王の私的蓄積は国有財産となり、誰にも開放されたのである。それ以来、同地のドイツ人の数は絶えず増加中である。60000のドイツ人、別の報告では50000とされるが、そのなかで6000人だけが、ただ2つの業種（4000人が仕立屋、2000人が靴屋）からの専門職人で、同地で整然と生活している。1808年の皇帝布告によってパリに最初のドイツ人教会が設立され、ドイツ人住民の増加の故に今日まで4人の福音主義聖職者のための敷地が寄贈され、ドイツ語とフランス語と交互に説教した。この教区を支援している人々のほかにだんだんとドイツ浮動人口がプロテスタント的²⁵⁶⁾人間からも自称最高40000人までも昇った。これらの人々は文筆家、芸術家、店員、奉公人、労働者からなり、ドイツ本国およびスイスのドイツ語地域のあらゆるところから群れをなしてパリに來たもので、長期または短期の滞留の後、ふたたび立ち去るのである。しかしながらこれらの階級のドイツ人の多くは教会とか魂への配慮とか神言とかについては全然気にかけていないだけでなく、故郷の風俗とか、両親・教師・聖俗の上長とか、くにもとで自分に圧力をかける影響からパリでやっと免れていることをむしろ喜んでいる。そういうわけで多くの人々にとって自由と放縦を満喫できることになり、彼らがパリで過す期間こそはまさしく「神はない」というべきときである。その結果という、どこででもそうであるが、原則的に支配的な日曜日の神聖さを犯すということに多少とも強制されてであるが一般的に関与する事態、婚姻関係についてとどめなく増し加わる輕薄さ、ふしだら女との破廉恥な共同生活、肉体的にも精神的にもめちゃめちゃになっていること、犯罪的な交わりや集まりへの参加、当局とその規則の侮辱、革命・共産主義者のいかさまへの誘惑、多くの人々の不名誉な労働または失業、フランス側からの輕蔑、借金、貧困、飢餓・裸、乞食、盗み、監獄、疾病・養老院—このようなドイツ人社会の報告はわが同胞の状態をまさに最近の革命の以前の時期について報告している。²⁵⁷⁾

この種のドイツ人が、パリで、一体どのような泥沼——神を避け冒瀆した気持、不信仰、不道德の泥沼のなかに落ち込んでいるかについては、ただ単に、その後スイスのフランス語地方で明るみに出た、以下に詳しく述べる現象だけでなく、かような

ドイツ手工業者仲間が直接パリから採り入れた実践的な共産主義的企図がそのことについての証言として語っている。パリからドイツを共和主義的侵略をもって脅かし、この計画をなお育成しようとするドイツ人パルチザン仲間の事実、二月革命から明らかになった事実は、ドイツ手工業者がパリから行なったあの企図、北アメリカの共産主義的コロニーを建設するための企図の裏面だけを形成している。こうして1844年6月、機械工 Fantz はウィスコンシンに向けてそのような一隊をひきい、これに続いて1845年、仕立工 Wessenbahn、時計工 Möllinger 配下の新たなドイツ人増援隊が動いた。この頃に(1844年)ブラシ製造工 Dietsch がミズリー州にそのような植民地を建設した。他の所での財産・労働共有制にもとづく原則に移ろう。道徳的・宗教的關係において先頭に立つのは婚姻の解消、すべての宗教、すべての礼拝の排除である。

「(Fantzsche Kolonieの名の) 新ドイツでは牧師も教会も礼拝も存在しない」—その結社規約の条項はこう謳²⁵⁸⁾っている。

校訂者マインホルトによる補注

- 255) ヴァッポイス編『ドイツ人移住と植民』〔Deutsche Auswanderung und Kolonisation, hrsg. von Johann Eduard Wappäus, Leipzig 1846〕, とくにS.63—Fl. Bl. 1848, S. 198参照。—さらにヴィヘルンはロェーエル『アメリカにおけるドイツの歴史と現状』〔Franz Löher, Geschichte and Zustände der Deutschen in Amerika, Cincinnati und Leipzig 1847〕をおりにふれて利用している。
- 256) population flottanteは放浪的でどこにも定住しない人口という意味である。Fl. Bl. 1848 S. 139を指す。—ヴィヘルンはまた “flottierende Bevölkerung” ともいっている。Fl. Bl. 1847, Sp. 148.
- 257) この項についての手控えをヴィヘルンは『パリ・ドイツ人 福音主義伝道報告』〔Bericht über die Evangelische Mission unter den Deutschen in Paris〕, Paris 1844, S. 3ff. から引用している。なおFl. Bl. 1845 I. Serie S.134ff.; 1846 S. 50f.; 1847 Sp. 204ff.; 1850 S. 318f. (1850年9月10-16日, シュトゥットガルト教会会議報告からの知らせ) も参照。
- 258) 北米におけるドイツ人植民地については, Fl. Bl. 1845 II. Serie S. 161ff.; 引用は, 同 S. 163. そこでの原本はWessenbahnであったが, 仕立工 “Weissenbach” と称している。